

三宅家住宅

江戸時代（1603～1867年）、三宅家住宅は武家の田邊の居宅でした。田邊家は1601年、石見銀山の初期に数多くの重要な行政職を担いました。その年、田邊彦右衛門が最初の銀山奉行となった大久保長安に当用され、鉾山政務の役人として働くことになりました。1603年に徳川家が武士の主導による政府を確立して1867年まで日本を統治しましたが、彦右衛門はこの徳川家に銀山の支配権が渡った後に鉾山経営のために雇われた最初の専門家たちの一人でした。彦右衛門の新しい同僚たちの多くと同じように、彦右衛門も石見の出身ではなく、甲斐の国（現在の山梨県）に暮らしていましたが、一族は石見周辺に落ち着き、鉾山管理の専門家となりました。田邊家はのちに、石見の銀が江戸（現在の東京）の幕府に送られる前に押された刻印を管理するまでになり、これは非常に栄誉な仕事でした。

田邊家の居宅は1800年に大森のかなりの部分を焼失させた火事で焼け落ちましたが、間もなく再建されました。建物は三宅家住宅として残り、この住宅が1974年に史跡指定された際に持ち主の名前を取って命名されました。建物は大幅に改装されているものの、家と通りの間にある庭、庭を囲む立派な塀、三つ巴（3つのコンマのような形から成る渦巻模様で、水を表し、火事から守ってくれと信じられていました）が施された棧瓦葺など、1800年代始めの武家屋敷の特徴を多く保っています。三宅家住宅は現在、一般公開されていません。